火の鳥

伊藤整

新潮文庫

火の鳥

定價はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草88 E

昭和三十三年八月三十日 發行
昭和四十八年十一月二十日 二十一刷

著者 伊藤整

發行者 佐藤亮一

發行所 株式會社 新潮社
郵便番號 一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

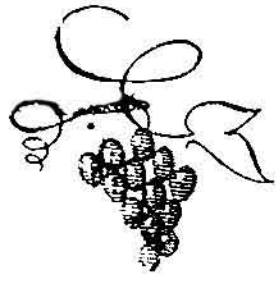
乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・東洋印刷株式會社 製本・有限會社加藤新榮社
© Sadako Itô 1958 Printed in Japan

新潮文庫

火の鳥

伊藤整著



新潮社版

1189

目次

一　むしばめる花……七
二　造花……三三
三　誘惑……五〇
四　變幻……六八
五　火の鳥……八六
六　渦巻……一三〇
七　薔薇座……一六五
八　猿と人……二〇四
あとがき……二四〇
解説……瀬沼茂樹……二四一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

火の鳥

Phoenix——a fabulous bird, of golden and red plumage, which, according to a tale reported by Herodotus, came to Heliopolis every 500 years, on the death of his father, and there buried his body in the temple of the sun According to another version, the phoenix, after living 500 years, built himself a funeral burning pile and died upon it. From his remains a fresh phoenix arose.

(The Oxford Companion to English Literature.)

一　むしばめる花

一

子供の泣き聲が耳に入って目が覺めた。眠りが足りないと思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうもないので、起きて鏡の前に坐ってみた。顏の皮膚は荒れていて、クリイムで拭っても汚れが殘っている。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私には言い出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が歸ったときは大分冷えていた。姉は起きて寢卷のまま石炭をくべ出したが、タア子が泣き出した。「いいのよ、お姉さん、私がする。タア子が泣いてる」と私は言った。私は子供の泣き聲が我慢できない。私の中に、いつまでも癒着しない傷があって、そこに響くのだ。泣き聲、子供の、赤ん坊の、人間の、猿の、あの泣き聲が私には我慢ならない。あれが私にはたまらない。「そう、じや沸かして入って下さいね。いやんなっちまうのよ。私がいないとすぐ目を覺ますんだから。」姉はそう言ってガチャンと焚き口の蓋をしめ、冷たい廊下を出て行った。その細帶をした後姿を、私は、汚ならしい生き物を見るように見送った。女は四十すぎても子供を產み、その子供のために、男への憎しみ怨みを忘れることができる。私は、女をそういうものとして證明して見せる姉をゆるすことができない。私は自分

がきつい目をしているのが分った。私なら、と思った。

そして、私は姉の父とちがう私の父を、どうかすると自分ですら「外國人」と思いがちな父の姿をちらと浮ばせた。昨夜、私はそのまま風呂を焚くのをやめて、自分の室へ戻った。酒の醉いはさめ切っていず、私はあの、どうでもなるようになれという意識のなかで、それでも型を崩すまいとして服を脱ぎ、蒲團の中に滑り込んだ。寢卷は枕の横に疊まれたままだった。

何という顔だろう。眼の前にある擴大された自分の顔、それは世間で言う、あの三十女の顔なのだ。あるときは、とても汚ならしく、あるときは、女の命のさかりのように見える。私は西洋の女のように早く衰えが來るのかも知れない。私の肌はほとんど白壁のように白い。日本の女にも白い肌はある。それは、東洋人に共通の赤い濁りから拔け出した間違いのような白さで、たいてい美しい血の色を皮下に持っている。私のはそうでない。私のは、何かの色、白く塗られたような、白いのが汚れであるような白さだ。髪は黑に近いが、大分赤味を帶びている。私の肌は、少女時代、それから二十五歳頃までは、自分でもうっとりするように美しかった。私は何時間も鏡の前に坐って、見ていたものだった。上級生や友達が私を見る目つきで、私は自分を眺めた。まぶしいような、うっとりするような、神聖なものを見るような目つき。この私は美しいのだ。ああいう目つきをあの人たちにさせずにおかないぐらい美しいのだ。私は自分の美しさに、その頃は、醉っていた。暗い所では黑く見え、明るい所ではやや藍色に見え、どうかすると綠色に近くなる眼の色、目と目の間が少し離れているのが少女らしいあどけなさを作っていることも私は知っていた。その自分の顔を、私はあの黃色い、赤い、でなければ血の色の透いて見える白い皮膚

と眞黑い髪と眼を持った日本の少女たちが、西洋の物語りの美しい妖精にあこがれる目つきで見つめるのを感じていた。だけど、彼女たちは怖いもののように私の身近に來なかった。私は美しかった。しかし私は誰のSにもならなかった。西洋人のメイドの生んだ子、いいえ、それではない。私の異質の美しさ自體があの人たちを近づけないのであった。私と愛の告白をし合ったり、身體の接觸をし合うのはあの人たちにとって、怖ろしいことだった。

そして、それが私をやるせなくし、私の毎日を、演技的にした。私はそのときから藝をしていた。七つまで英語で暮していた私は、父が歸國して母と二人、いいえ、間もなく姉と三人で日本語で暮し、日本の學校や友達の世界に入ったけれども、女學校に入ると英語は急速にうまくなった。初め、それを私は自分の赤い髪と同じように恥じ、隱そうとした。しかしその卒業頃、私は自分の美しさが人の目を引くようになると同時に、自分の生まれに對して自信を持った。女子大學に入り、私は積極的に自分を作って行った。日本が中國で戰爭を始める少し前、あの女子大學には祕密な社會科學研究會もあり、定期的に外語劇大會が催されていた。私の容貌と語學とは、そういう雰圍氣の中で目立った。私はロメオを、チルチルを演じた。いつも男役が私にまわった。背が高いとか、動作がはっきりしているとか言う口實で、私は主役を押しつけられた。そして學園生活でも、私はそういう役を持っていた。日本の家庭で、未來の同じような家庭の主婦になる鑄型にはめ込まれながら育って來た少女たちは、自分の意見、自分の一人立ちの心を持っていないのだ。何かにもたれ、絡まり、陰口を言う。私はそんな風に育たなかった。父が歸國してから呼び寄せた姉に向っては、母は「フミ子、そんな歩き方は」とか「フミ子、足袋のコハゼは

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

どうしたんです」と言うように、自分の附屬物としてやかましく言ったが、私に向っては、階級の違う人の預り子のように接した。父の記憶が、父の動作が、いつも、私の中に現れるという豫期と怖れで母は私を見ていたにちがいない。父の記憶が、私を日本人に躾けることから母を妨げたのだった。私は母にかしずかれて育った。姉も次第にその母の調子を見習った。父からの毎月の送金はきちんと正金銀行に拂い込まれていた。つまりそれは私の金だったのだ。戰爭が近づき、爲替相場が變ると、二十ポンドの金は日本の圓で次第に多くなった。私は空白な成長の中で、母や十ちがいの姉や級友たちが作る窪み、遠慮、期待などの中へ自分を伸ばして行くより外なかった。英語の教師たちですら、私の發音の自然さに一目おいて、私を腫れもの扱いにした。私はその頃から、時々ヒステリックになった。私が手を伸ばすと、すっと相手が引っ込む。その空白な周圍の苛立たしさ。それは恐怖のように私を驅り立てた。私は自分の鑄型を、父を求めた。父に手紙を書くことは禁じられていた。私には一人の妹、二人の弟が、イギリスに居るということだった。私はある時ラムを讀んで泣いた。それは、ちゃんとした家庭で、落ちぶれた好ましくない緣者が持てあまされる話だった。私は母にも言わない悲しみを持つようになった。私は姉に物をぶっつけ、何日も母に口を利かなかった。母はおろおろし、足音を忍ばせて家の中を歩いた。

私は學園であの祕密研究會に出た。黑い色の汚いカラーをつけた青年が階級構成の理論を說明し、五六人の學友が身體を固くして聞いていた。私はその歸りにもらったパンフレットを何册か讀んだ。そしてそれっきり出なかった。「どうしたのよ、エミちゃん、もう出席しないの？」と、

男のようないかつい顔と身體をした同級生の村井さんが、教室の窓の下の、乾いた下水の兩側に脚を開いて、私に言った。村井さんですら、私に向っては顔を近寄せない。私がなにか觸ってならない神聖な、また穢れたもののように。私は「うふっ」と含み笑いして、靴底でザクザクする下水溝の角をこすっていた。It can't mend my sole. と私はその時習っていた「ジュリアス・シィザア」の靴屋を引用したいところだった。地下運動の資金募集の話があったとき、私は村井さんに金をあげた。「これ、あなたにあげるのよ」と私は言った。とにかく私に祕密をうちあけるところまで近づいてくれた村井さんに、私はあなたが好きだけど、と、もう少しで言うところだった。私を學友と親しく結びつけたかも知れないたった一つの機會はそれで失われた。

その頃私に、いいえ、私の不幸に氣づいたのは會話の教授にいらしていた尼さんのアーメンガアド先生だった。私に話しかけるとき、アーメンガアド先生の皺に蔽われた眞蒼(まっさお)な大きな眼は、心持ち外の生徒へよりも長く注がれていた。私は私で、授業が終って櫻の並木の下を、校門のあたりまで神經痛の脚を心持ち引きずるようにして歩いてゆく先生の黑い尼僧服の後姿を、じっと見送っていた。

でも私は先生の姿が見えなくなると、すぐスカートをなびかすようにして階段を驅け下り、校庭の隅にある劇研究室に行くのだった。私は花形だった。その頃絶頂にあった少女歌劇では、男役をする少女たちが花形だったように、女の學校ではロメオになりチルチルになる私が花形だったのだ。そして私はそのとおり振舞った。自分の美しさにこだわらないこと、確信ありげに振舞うこと、私にとっては學校が舞臺だった。見られて生きること、內側のむなしさを逃れて、見え

る自分を作り、皮膚や表情や動作で生活すること、火花のようなものを絶えず身のまわりに作っていることが私の日常だった。いつか私はアーメンガアド先生に話しかけるかも知れない。すると私は別な私になるかも知れない、と私は思っていた。でも私はそういう自分にならないように一生懸命やらなければならないのだと思った。アーメンガアド先生とお話したりすれば、私は自分を失って泣き出すだろう。私はみなし兒だ。私はどこにも生きる場所のない捨兒なのだ。よしんば泣いて、あの先生の胸にすがったとしても、それが何だろう。アーメンガアド先生は私と同じじゃない。あの人だって心は向うにある。大海と大陸を隔てた、古い文明と古い都市と古い生活と、そして私がその一人ではない群集とに、あの人はつながっている。

二

そして今、それから十年あまり時がたって、私は、雀の囀(さえず)っている窓の前で化粧を落した自分の顔を見ている。怖いもののように、内證で、私は自分に向い合う。なんという汚れだろう。きめに染み込んだ塵のようなものは、もう取れないのだ。あの黄色い、なめらかな皮膚には浸み込まないものを、私の皮膚は吸い取り、そして定着させてしまう。あの聖畫に漂うような、金色に反映する美しい少女時代の私の皮膚は失われた。そして顔の形が、頬、顎、輪郭、目鼻立ちが、私をぞっとさせる荒地のように擴大されて鏡に寫っている。モンゴリア型。目と目の間が離れ、頬骨が廣く出ばっている東洋の顔が、私をおびやかす。ほら、ねえ、と言うように。母が亡くなってから、世帶の苦勞をした揚句私の所へもどった姉を、私は母とそっくりだと思った。だが、

私もそうなのだ。皮膚の輝きの失われた私の顔の型は、それはあの母の顔だった。そして次第に私はこの土地に結びつき、この東京に、日本の人間に混り込んで行くのが分る。だが私は氣を取り直す。顔は役者の私にとつては、カンヴァスのようなものだ。なあに、という氣持で、私はその恐怖をすっと跨いで越す。今私の前にある顔は、これはどうにでも使える。その上を一度塗れば、それは昔の少女の私以上の、どんな種類の美しさでも作り出せる。そして私は美しい、と自分に言いきかせる。自分がそう思い込んだ瞬間から、私の顔は美しく輝き出すような氣がする。何という考に私は慣れて來たのだろう。

扉を叩く音がして姉の顔がのぞいた。「ちょっと」と言って、音を立てずにカーペットをふんで來る。いつでも小聲、猫のように、腰をかがめて歩く。もうタア子の晝寢の時間らしい。姉は小さな封筒の手紙を差し出して、

「昨日いらしたんだけど、留守だと申し上げたら、手紙を書いて……」

私は聞きながら文字を見てはっとした。杉山の手だ。

「それで……」と私は姉を見る。

「何ともおっしゃらないで……昨夜忘れていたものだから。」

「ええ、いいわ、ありがとう。」

私が聞きたいのは杉山がどんな樣子をしていたか、どんな表情だったかということだけれども、姉はそこまで私の方に立ち入らない。出て行く姉の後から、

「食事もうすぐするわ」と言って私は封を切る。事務所にも二度男の聲で電話があったと言う。

手帳を引き裂いた紙に「一度お目にかかりたいのです。面倒な話ではありません。吉良氏からも話して頂いたと思います。また參ります」と書いてある。こちこちと固まった見ていて苦しくなる文字だ。この文字の性格がすべてのあいう事の原因だった。何かぞっとするような、自分の内側にある厭わしい記憶が群らがって來る。網の一端を鈎にかけてしまうと全體がやがて水の中から上って來る時のように、つながって群らがって押しよせる。強い力で胸をしめつけられるような緊張が始まる。小劇場の文藝部室の亂雜な埃をかぶった棚や背の破れたソファや、母がやって來て玄關にたたずんでいた彼の下宿や、今と同じ字で書いた彼の賣れない脚本の封筒にペタペタと貼った切手など。それから、犬が爪先でしがみつくように、「別れない理由はどうでもいいんだ。おれは別れないんだ」と言って、痩せた身體で疊に胡座(あぐら)をかいたまま、あらゆる筋肉を引きしめるようにしたあの人の顔が浮んで來る。

だが、それと重り合うようにあの田島先生が、學園の大きな硝子戸のはまった談話室で、腰かけた私たちの前に進んで來たときの黑いズボンの姿が現れる。英文助教授の岩井女史は子供のようにはにかんで紹介した。それを待っている間、四十歳近くに見えた田島先生は岩井女史の戸まどいも私たちの緊張も全體として靜かな作法の中に受けとっていた。あの歩きかた、片足ずつ意識して前へ出す愼重な落ちつきは、日本人の紳士のいかめしさと違うものだった。私は遠くに、あの煙草の匂のようなもの、父が家の中を歩きまわった姿を思い出した。それからよく訪ねて來たマクカラアさんやマクカラア奥さんのカステラのような匂を。あの軟い、他人にも自分にも均等に氣を配る注意深さ。あれは飜譯ものの上演になると、私たちの仲間に缺けているものだった。土

岐さんも笛子さんも、みんな自分にだけ集中してこちこちの日本人になる。後になって、それだと段々氣のついたもの、それは父と田島先生に私が嗅ぎつけた共通のものだった。「私は先頃ヨーロッパの見學旅行から歸りましたので、向うの實驗的な新しい演劇についてお話したいと思います……」ピネロウとダンセイニ、ピトエフ、ヴィュウ・コロンビエ、クレイグ、藝術座の話。純粋演劇と實驗劇場。あの時のお話は、その後の薔薇座での稽古の間に絶えず聞かされた演技論と私の心の中で混り合っている。しかしあの黒いズボンの片足ずつを靜かに伸ばすように前へ出た先生の最初の印象、あれが私を薔薇座に引き込んだ本當のキッカケだった。

そのあとで私たちは、一週間ほど前にすんだ外語劇のキャピュレット家の廣間の場を立稽古の形でお目にかけた。ずいぶん恥しかった。セリフには自信があったが、研究會長の岩井女史があがってしまっていたので、それが皆に傳染した。田島先生は幕になると同時に「あなたは」と、私を指で差し、鋭い、はっとするようなきつい眼で私を見て仰しゃった。地で行っていてかなり上手だ。だがそれは、言わばあなた自身の顔や身體の力を出しているだけです。ロメオは口實であるにすぎませんね。もっとも專門家の批評をしているのでありませんから、これは言いすぎですが、と。外の人たちには何も言わなかった。そのあとで奥家先生と岩井女史に讃辭を呈されたとのこと。そして、私のことを訊ねていたそうだ。そして私は卒業後、いやいや勸めていた女學校の英語教師に少し慣れた頃、突然田島先生のところへ呼び出されて、言わば夢中でアーニャをやらされ、その後でびっくりするような嚴しい稽古と、俳優仲間の意地惡さと、嫉妬の渦の中へ投げ込まれた。私の生活はそうして始まったのだった。杉山とのことも……

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com